

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 5 月 3 日現在

機関番号：33801

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12402

研究課題名(和文)計量的観点に基づく近世後期口語資料の分析と評価

研究課題名(英文)Analysis and Evaluation of Late Modern Japanese Colloquial Materials from Quantitative Perspectives

研究代表者

市村 太郎 (Ichimura, Taro)

常葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：10701352

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文): 本研究は、心学道話や『古今和歌集遠鏡』等の近世後期口語資料のコーパスを構築し、国立国語研究所の『日本語歴史コーパス江戸時代編 洒落本』にみられる近世後期洒落本の江戸語・上方語の話言葉等と、主に計量的な面から比較・対照することを目指した。

研究期間内において、『古今和歌集遠鏡』(全)、『鳩翁道話』(一部)に関する、高度な文書情報を付したコーパスを作成し、公開するに至った。また、『日本語歴史コーパス江戸時代編 洒落本』等を活用した研究を発表するとともに、『古今和歌集遠鏡』と洒落本の程度副詞を取り上げた論文や、コーパス構築に関する論文を執筆し、刊行が予定されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年国立国語研究所より『日本語歴史コーパス江戸時代編 洒落本』が公開され、江戸時代後期の日本語研究は、大きく進展しつつある。ただ『洒落本』は一級の資料であることには変わらないものの、言語の使用場面が極端に遊里に偏るといった点において、当時の言語の実態という点では問題が残されていた。

本研究では、洒落本に偏る近世後期語研究を補うため、本居宣長『古今集遠鏡』や心学道話など、洒落本とは異質の口語資料を電子化・コーパス化し、多様な資料による、複合的な観点からの近世後期の口語研究を、より速く多くの情報を得られる形で進められるよう、データを整備しつつ、筆者が取り組む程度副詞研究を例に試みたものである。

研究成果の概要(英文): This study aimed to build a corpus of colloquial Japanese documents from the late modern period, such as "Kokinshu-Tokagami", and to compare and contrast it mainly from quantitative perspectives with the spoken Edo and Kamigata languages of "Japanese Historical Corpus Edo Period Series I Share-bon" (NINJAL).

During the research period, I created and published the corpus of "Kokinshu-Tokagami" (all) and the corpus of "Kyo-Dowa" (some parts). In addition, I have presented research utilizing "Japanese Historical Corpus Edo Period Series I Share-bon". I have written a paper on the degree adverbs in "Kokinshu-Tokagami" and the Share-bon books, and a paper on corpus construction, which is scheduled for publication.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 近世語 コーパス 古今集遠鏡 洒落本 心学道話 上方語 江戸語

1. 研究開始当初の背景

日本語史の通時的研究においては、中古・中世は京都、近現代は東京というように、「中央語」を設定して、その話し言葉の流れを追うのが一般的な手法である。ところが、政治・経済の中樞が京都・大坂から江戸に移行しつつあった江戸時代にあっては、全期を通じた「中央語」を設定するのは難しい。そこで前期は上方語を、後期は江戸語を「中央語」とみなし、通時的言語研究を行うのが、今のところ多く採られる方法である。

しかしながら、元禄・享保期以降、洒落本などの江戸の口語資料が多く出現しはじめるからといって、白が黒となるように、言語上の「中央」が一気に移動したわけではない。本居宣長は、寛政5(1793)頃に著した『古今和歌集遠鏡』において「俗言は。かの国この里と。ことなることおほき中には。みやびことにちかきもあれども。かたよれるみなかのことばは。あまねくよもにはわたしがたければ。かゝることにとり用ひがたし。大かたは京わたりの詞して。うつすべきわざなり。」とし、「あまねくよもにわたす」ため、古今集の口語訳に「京わたりの詞」を採用した。ここにみられるように、京都の言葉が「通じる言葉」であるという意識は、この時点において依然として存在する。仮にある程度比重が江戸語に動いていたとしても、近世後期は、上方語と江戸語が二大方言として存在したともとらえられる。

そのような二大方言の時代である近世後期語について、話し言葉における「近世共通語」の存在を仮定する考え方もある。森岡(1980)や平澤(1983)等によると、心学道話や『唐詩選国字解』などの講義物の言語が、近世共通語の要素を反映する資料であるという。

『古今集遠鏡』にせよ、心学道話にせよ、漢籍国字解にせよ、近世後期において、このような、多くの人に理解されることが少なからず志向されたであろう資料は、それぞれ、テキストとしてどのような特徴のある「口語」が用いられていると言えるのだろうか。また、洒落本のような写実的とされる口語資料の会話文等とどの程度、またどの点において異なっているのだろうか。洒落本などの写実的な口語資料にも「共通語的要素」が見られるとしたらどのような属性の人物に見られるだろうか。心学道話などを近世後期の「共通語」的言語が反映されているという見方は妥当であろうか。

これらの点について、従来、個々の用法の列挙や個別的な記述は進められているが、客観的な指標をもって応えるためには、計量的・総合的な分析が不可欠と考えられる。近日、国立国語研究所により洒落本のコーパスの公開が予定されており、ようやく近世口語資料の計量的分析を行う土壌が整えられはじめている。本研究はその新たな「土壌」を活用・開拓し、コーパスの拡充を行いつつ、計量的な観点による同時期の口語資料を評価するための材料の収集とそれによる分析を試みるものである。

2. 研究の目的

本研究は、心学道話、『古今和歌集遠鏡』等、近世後期の、時に「共通語」を志向したとも言われる口語的資料を電子化、コーパス化し、公開予定の『日本語歴史コーパス江戸時代編 洒落本』等との計量的比較を行うことを通じ、洒落本の江戸語・上方語、心学道話、『古今和歌集遠鏡』等それぞれの資料における口語の在り方を分析し、各資料の違いや共通点、日本語史資料としての価値や、共通的要素の解明を目指す。

これまで、森岡(1980)のように、出現する表現の例示や個々の資料の個別的な分析は行われているが、江戸・上方の洒落本を含めた規模での計量的な分析は十分に行われてきていない。そこで本研究においては、洒落本や狂言のコーパスを作成した際のノウハウを用いながら新たに各資料のコーパスを作成し、国立国語研究所より公開される予定である洒落本のコーパスと様々な面から対比することで、総合的な分析を数的な根拠を提示しながら行うことを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、主として以下の を実施した。

近世後期口語資料のコーパスの拡充

計量的対照を行うためのコーパスを構築した。対象資料は下記の通りとし、研究の進捗に合わせて適宜増減させた。本研究で作成したコーパスは、活字翻刻本の許諾等に左右される可能性はあるが、研究期間中あるいは終了後に可能な限り速やかに公開する。

【資料】 『鳩翁道話』 『道二翁道話』 『古今和歌集遠鏡』 『唐詩選国字解』

【底本】 活字翻刻本を参考に、筆者所蔵本を底本として作成する。

【仕様】 国立国語研究所『日本語歴史コーパス』の使用に基づく文書情報や話者情報、形態論情報、底本索引情報の付与

洒落本コーパスと、作成したコーパス類の計量的比較に基づく資料評価

で作成したコーパスと『日本語歴史コーパス江戸時代編 洒落本』の江戸語・上方語両方言の資料や、それぞれの資料同士を対比し、資料の位置づけ等を行う。観点としては、品詞比率や語種比率など、一般的なテキスト分析の計量的な観点と、森岡(2004)において「地域や階層によ

らず中庸を得た講述」として列挙された語法等、特にテキストの文体的特徴が反映されること
の多い副詞および助動詞の使用状況を中心的な観点とすることを想定した。

研究期間内では、主として洒落本コーパスの話者情報を利用した、洒落本語彙の計量的特徴と資料性の検討、程度副詞を対象とした洒落本と『古今集遠鏡』の比較を行った。

4. 研究成果

2018年度は、まず本課題に関する資料収集 本課題の対象となる資料や本課題に関連する資料の版本や翻刻本の入手、本課題に関連する研究文献の収集につとめた。また、研究成果物作成の準備段階として『古今和歌集遠鏡』、『鳩翁道話』、『道二翁道話』などの心学道話等、本課題の対象となる資料について、テキストの取舍選択、入力順の確定、必要情報や想定される文書構造等の検討を行い、XML 構造化を前提としたテキストデータの作成を行った。上記のうち、『古今和歌集遠鏡』に関して、学生の協力を得て、テキストの分別や文・文字情報のアノテーションを行い、XML 構造化を進めた。加えて、本課題でコーパス構築を進めている資料群との比較対象とする予定である、国立国語研究所『日本語歴史コーパス江戸時代編 洒落本』について、話者データ・本文データの見直し作業を進め、国立国語研究所より最新データをリリースするとともに、コーパス作成に関する研究発表を行った。

2019年度は、研究対象である本居宣長『古今集遠鏡』コーパス構築を試行した。入力したテキストデータについて、古今集本文や宣長訳を仕分けし、アノテーションを行ってXML データを作成した。そのうえで、国立国語研究所によるコーパス検索ツール「ひまわり」用データを作成し、その有用性や課題を確認した。その成果については、「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」活用班(近世・近代グループ、文体・資料性グループ)研究発表会において発表した。また、当該研究会発表においては、研究例として『古今集遠鏡』訳出部分に用いられた程度副詞の使用状況を確認し、先に作成した国立国語研究所『日本語歴史コーパス 江戸時代編 洒落本』における程度副詞の使用状況と照らし合わせ、その特徴を論じた。加えて、中古語・近世語の対訳資料としての利用価値を示唆した。

2020年度は、昨年度から引き続いて筆者所蔵版本による本居宣長『古今集遠鏡』のコーパス化を進め、『Himawari 版古今集遠鏡コーパス Ver.0.5』(未公開)の時点から、版本に基づく本文の校訂やXML データの再構築等を経て、1月末に『Himawari 版古今集遠鏡コーパス Ver.0.8』を公開するに至った。また、その構築過程についてとりまとめ、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」通時コーパス活用班 近世グループオンライン研究発表会において、「Himawari 版古今集遠鏡コーパスの構築 版本に基づく再構造化の試み」と題して研究発表を行った。このほか、本研究課題の範囲で見直しを行った『日本語歴史コーパス江戸時代編 洒落本』に付与されている「話者情報」を利用した成果として、洒落本の助動詞を対象に集計し、そのデータを用いて本年度公開された田中牧郎編『コーパスで学ぶ日本語学 日本語の歴史』(朝倉書店)中の「第6章 江戸時代」を執筆し、データの特性の解説や利用法、研究への応用例などを示した。

2021年度は、前年度公開した『Himawari 版古今集遠鏡コーパス Ver.0.8』の作成過程やこれを活用した研究論文等を執筆するとともに、国際会議において江戸時代語コーパスを用いた発表を行うなど、研究成果のとりまとめや公表につとめた。それに加えて、ここまでの研究の蓄積・データ作成の経験を基に、歴史コーパスに対する話者情報の付与過程に関する論考を執筆し、公表した。また、3月には『Himawari 版心学道話コーパス試作版 Ver.0.1』を公開した。心学道話のコーパス化に着手した成果をわずかではあるが公表することで、モデルを示し、今後の続編の公開への道筋を作った。そのほか公開には至らなかったが、関連資料の収集・電子画像の作成や、テキストデータの作成において、蓄積ができたところである。

研究期間終了後も、引き続き本研究の成果の取りまとめや、論文等の出版・公開につとめるとともに、次期研究課題において本研究で得た知見や作成したリソースを活用していきたい。

【参考文献】平澤啓(1983)「漢籍国字解の言語 その共通的性格」『国文学論集』16、森岡健二(1980)「口語史における心学道話の位置」『国語学』123、森岡(2004)「汎共通語」『近代語研究第12集』武蔵野書院

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 市村太郎	4. 巻 188
2. 論文標題 副詞「ほんとうに」の展開と「じつに」「まことに」 近代語から現代語へ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 112 - 98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 市村太郎	4. 巻 なし
2. 論文標題 歴史コーパスに対する話者情報付与の試み 洒落本コーパス構築上の課題を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田大学日本語学会設立60周年記念論文集第1冊 言葉のしくみ	6. 最初と最後の頁 135-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市村太郎	4. 巻 なし
2. 論文標題 『古今集遠鏡』に見られる程度副詞類とその周辺 洒落本での使用状況との比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『コーパスによる日本語史研究 近世編』（予定）	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市村太郎	4. 巻 なし
2. 論文標題 『古今集遠鏡』を対象とするコーパス構築の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『コーパスによる日本語史研究 近世編』（予定）	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市村太郎・村山実和子	4. 巻 なし
2. 論文標題 解説 日本語歴史コーパス江戸時代編	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『コーパスによる日本語史研究 近世編 』（予定）	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 市村太郎
2. 発表標題 Himawari版古今集遠鏡コーパスの構築 版本に基づく再構造化の試み
3. 学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」通時コーパス活用班 近世グループオンライン研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 市村太郎
2. 発表標題 『古今集遠鏡』コーパス構築の試み
3. 学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」活用班（近世・近代グループ、文体・資料性グループ）研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村山実和子, 市村 太郎, 小木曾智信
2. 発表標題 『日本語歴史コーパス 江戸時代編 洒落本』の公開
3. 学会等名 日本語学会2018年度春季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Taro Ichimura, Yoshiyuki Okabe
2. 発表標題 Utilization of Speaker Information Annotated in the Share-bon corpus and the Ninjō-bon corpus (Studies of Early Modern Japanese based on the Corpus of Historical Japanese)
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田中牧郎 (編), 田中牧郎, 鴻野知暁, 須永哲矢, 池上尚, 渡辺由貴, 市村太郎 (著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 192 (内115-135を執筆)
3. 書名 コーパスで学ぶ 日本語の歴史 (「第6章 江戸時代」を分担執筆)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Himawari版古今集遠鏡コーパスVer.0.8 https://sites.google.com/view/ichimurat/%E5%B8%82%E6%9D%91%E7%A0%94%E7%A9%B6%E5%AE%A4/%E7%A0%94%E7%A9%B6%E8%B3%87%E6%96%99?authuser=0 『日本語歴史コーパス 江戸時代編 洒落本』(Ver.1.0) https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html#share Himawari版心学道話コーパス試作版Ver.0.1 https://sites.google.com/view/ichimurat/%E5%B8%82%E6%9D%91%E7%A0%94%E7%A9%B6%E5%AE%A4/%E7%A0%94%E7%A9%B6%E8%B3%87%E6%96%99?authuser=0</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------